青年期の親子関係と友人関係のアタッチメント表象

東　智美

問題

Bowlby (1977) は，アタッチメントをある特定の他者に対して強い結びつきを形成する人間の傾向と定義づけている。アタッチメントは乳児期が過ぎると消えるのではなく，人間の一生を通して存在し，青年期以上になるとアタッチメント対象は家族以外の人物もなりえると想定していた (Bowlby, 1969)。その実証研究として Hazan & Zeifman (1994) は，アタッチメントの機能が親から仲間へと徐々に移行していくことを示した。このような結果を支えるものとして内在化された表象レベルでのアタッチメント，すなわちアタッチメント表象がある。アタッチメント表象は，アタッチメント対象とのやりとりの中で自己と他者の関係性について作られるもので，それを通して対人関係を予測したり行動したりすることができる (レビューとして，数井・遠藤, 2005)。アタッチメント表象の研究について青年期の親子関係と恋人関係についての語りの研究はされている (Treboux, Crowell, & Waters, 2004) ものの，実際に青年期の親子関係と友人関係の語りの比較検討は今のところ見当たらない。

数少ない友人の面接研究である Martin & Davies (2017) でも使用した Three-Words-Interview (3WI: Martin & Davies, 2015; 房宗, 2020) では，青年が一人選んだ友人 (親友) 関係のアタッチメント表象について,「アタッチメントの顕著性」と「アタッチメント様相」の 2 側面を測定できる。「アタッチメントの顕著性」とは，関係性の語りの中でアタッチメントの機能がどの程度顕著であるかについてである。「アタッチメント様相」とは，ネガティブな気持ちになった時におけるアタッチメント対象との具体的なやりとりのことである。

房宗 (2020) の修士論文によると，日本においても青年期においてネガティブ情動を感じた際に，他者とやりとりすることでネガティブ情動が低減するというアタッチメントのやりとりが，友人関係にもみられることがわかっている。しかしながら，アタッチメント表象の親子関係と友人関係の類似点や相違点はわかっていない。

そこで本研究の目的は，房宗 (2020) で使用した 3WI を青年期における親子関係と友人関係の表象測定として使用し，(1) 親子関係と友人関係のアタッチメントの顕著性 (2) 親子関係と友人関係のアタッチメント様相の類似点と相違点を探索的に検討することである。

方法

参加者　学生 10 名 (男性 5 名，女性 5 名，平均 21.5 歳，*SD* が 1.08)。

手続き　個別の半構造化面接 (1 時間程度)。

アタッチメント表象を測定するための面接内容　①アタッチメントの顕著性: 3WI の Part I・II (Martin et al., 2015) を邦訳した房宗 (2020) を使用した (Part I は親友を一人選ぶ Part のため親子関係においては省略した)。親友／母親との関係性を最もよく説明する 3 つの単語を選んでもらい，その単語を説明するような出来事を詳細に語ってもらった。その語りから，友人関係と親子関係の表象がアタッチメントの機能を反映している程度を 7 件法で評定した。4 点と評定された参加者については高群低群に分けるために，評定者と協議した。②アタッチメント様相: 3WI の Part III のうち房宗 (2020) と同様に，参加者が動揺したりストレスを感じたりしたときに，親友／母親とやりとりをした出来事についての質問部分を使用した。評定はテーマティックアナリシス法 (TA 法: Boyatzis, 1998; 土屋, 2016) を用いて行った。

結果と考察

友人関係と親子関係のアタッチメントの顕著性　3WI の Part Ⅱの語りにおいてアタッチメントの機能がどの程度顕著であるかを検討した。友人関係と親子関係の得点の比較に，対応のある *t* 検定を行った。$t(9) = 0.45, p = .66, d = 0.16$ であり，友人関係と親子関係に有意な差は見られなかった。高群と低群に分けた時の人数割合は以下の通りである。アタッチメントの顕著性が, (1) 親と友人ともに高いのが 2 名, (2) 親と友人ともに低いのが 4 名，(3) 親は高いが，友人が低いのが 1 名，(4) 親が低いが，友人は高いのが 3 名であった。(1) にあたる参加者は 10 名中 2 名であり，アタッチメントは連続性や一貫性が主張されていること (Bowlby, 1969) から，親が自分のアタッチメント

対象であると語った人は，友人も同様にアタッチメント対象と語る可能性を考えていたが，母親のアタッチメントの顕著性が高い参加者が少なかったため，多くの参加者に当てはまることではなかった。しかしながら，親と友人ともにアタッチメントの顕著性が低い (2) の参加者と (1) の参加者を合わせると 6 名であり，アタッチメントの連続性や一貫性を示す可能性も残されている。アタッチメントの顕著性が高いのは，友人関係の語りにおいて 10 名中 5 名であったが，親子関係の語りにおいては 10 名中 3 名であった。友人関係は親和的関係やそれほど危機的ではない時に好まれること (Hazan et al., 1994) から，友人関係はアタッチメントの顕著性が高く表れない可能性を考えていたが，それとは異なる結果であった。多くの青年は，両親に強いアタッチメントを示すこと (Bowlby, 1969) から，親子関係はアタッチメントの顕著性が高い可能性を考えていたが，それとは異なる結果であった。この結果から，友人関係では母親から友人へと移行したアタッチメントの機能を果たしている可能性を示唆している。

以上の語りの結果から，アタッチメントの連続性や一貫性の可能性や，アタッチメント対象が親から仲間に移行している可能性など，様々な可能性が語りの中から見られた。アタッチメント機能は親から仲間へと徐々に移行していくことが Hazan et al. (1994) で示されているが，この研究では移行した時に母親に対するアタッチメントの機能が薄れていき，仲間へとアタッチメントの機能が移行するのか，それとも，母親に対するアタッチメントの機能が残ったまま，主たるアタッチメント対象が仲間へと移行していったのかはわからない。そのため，今後の研究ではアタッチメントの機能の移行についての親子関係と友人関係のつながりについて検討していきたい。

友人関係と親子関係のアタッチメント様相

3WI の Part Ⅲにおいてネガティブな気持ちになった時に親友／母親に伝えたやりとりについて TA 法を用いて評定を行った。その結果以下のような類似点や相違点がわかった。

類似点としては 3 点挙げられる。1 つ目は，親友に伝えた出来事があると答えた 9 名中 8 名，母親に伝えた出来事があると答えた 7 名中 6 名が，出来事が起きた際のネガティブな気持ちについて相手に伝えた。2 つ目は，親友に伝えた 9 名中 8 名，母親に伝えた 7 名中 5 名の親友／母親が参加者を保護したり，寄り添うような反応を示していた。3 つ目は，親友に伝えた 9 名，母親に伝えた 7 名全員が，親友／母親とのやりとりによるネガティブな気持ちの低減を語った。

ここから，ネガティブな出来事を語った参加者はその気持ちを相手に伝え，それに対し相手は参加者を保護したり，寄り添うような反応を示し，そのやりとりにより，ネガティブな気持ちが低減していた。これは，アタッチメントの典型的なやりとりであり，親友や母親をネガティブな気持ちになった時に頼った参加者は親友／母親ともに，同じような方法でアタッチメントのやりとりが行われていたことがわかった。

相違点としては 2 点挙げられる。1 つ目は，親友と母親で，伝えた出来事の内容に違いが見られた。親友に伝えた出来事があると答えた 9 名中 6 名は，対人関係における悩みや困難については親友に伝え，母親に伝えた出来事があると答えた 7 名中 4 名は，勉強についての悩みや困難について母親に伝えていた。これらの語りは他の関係性には見られないことであった。2 つ目は，出来事を聞いたときの親友／母親の反応に違いが見られた。親友の反応として，9 名中 2 名がネガティブな出来事の話から別の話題に切り替えるような反応を示した。一方で，母親の反応としては，7 名中 2 名が参加者の雰囲気や表情などにより母親が気づき，声をかけていた。これらの語りは少数ではあったが，他の関係性では見られず，相違点として挙げられるだろう。

ここから，ネガティブな気持ちになった時に親友と母親で伝える出来事の内容や相手の反応などの詳細な部分に相違点がある可能性が示唆された。

以上の結果から，親子関係と友人関係でアタッチメントのやりとりには類似点が見られたが，やりとりの詳細な部分には相違点が見られることがわかった。

総合考察

本研究ではアタッチメントの顕著性とアタッチメント様相を調べることで，青年期の親子関係と友人関係のアタッチメント表象の様々な類似点や相違点が示唆された。今後は参加者の人数を増やし検討することで，青年期のアタッチメントにおいての母親と親友の役割がより明確になるだろう。

（指導教員：梅村 比丘）